Mobile Contents Front Line
モバイルコンテンツ最前線

Case Study

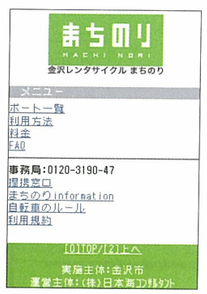
金沢市「まちのり」スマホサイト：地域行政サービスも「SoLoMo」の時代

「SoLoMo」というバズワードをご存じだろうか。「Social」「Local」「Mobile」の頭文字を取った造語で、ソーシャルメディアや位置（ローカル）情報と連動してユーザーの利便を向上させるモバイルサービスを指す。少し前まではこうしたサービスの開発にはそれなりの予算と手間が必要とされたが、スマートフォンの普及によって、驚くほど手軽に実装できるようになった。それゆえ、小さなプロジェクトでもアイデア次第で大きな価値を生む可能性を秘めている。今回取材したのは、石川県金沢市の行政サービスにおけるSoLoMo活用の事例だ。「地域（ローカル）活性化」にモバイルを利用する事例としても注目したい。

中谷健一__NAKAYA Kenichi
http://www.trimtab.jp/
Twitter ID: @kenichi_n
トリムタブジャパン（有）代表取締役。モバイルマーケティング成功事例蒐集家。情報誌編集を経て2000年からモバイルに携わる。現在はデジタルとリアルを横断するマーケティングや新規事業の企画・コンサルティング業。本連載では、最近、再注目されている企業の「モバイル活用」を伝えていく。

01　金沢レンタサイクル まちのり

PC版



フィーチャーフォン版

スマートフォン版

http://www.machi-nori.jp/
2012年3月に正式スタートした金沢市のコミュニティサイクル事業（新しいスタイルのレンタサイクル事業）「まちのり」の情報サービスサイト。市内18カ所のサイクルポート（貸し出し・返却拠点）の貸し出し・返却可能台数がリアルタイムで確認できるほか、利用方法をテキストや動画で確認することができる。ユーザーの利用デバイスに応じて、それぞれのUIを用意している。PC版とフィーチャーフォン版は3月の事業開始時に、スマートフォン版は8月にサービスインした。どのデバイスからも同一URLでアクセスできる

事業実施主体：金沢市
運営・企画：（株）日本海コンサルタント
PC・フィーチャーフォン版制作：（株）ペダル
スマートフォン版制作：PIAPPA

「金沢レンタサイクル まちのり」は、コミュニティサイクルと呼ばれる新しいスタイルのレンタサイクル事業だ。金沢市内18カ所に設置されたサイクルポートのどこででもセルフサービスで自転車を借りたり返したりできるという点が、一般的なレンタサイクルと異なる。2014年に予定されている北陸新幹線（東京〜金沢間）の開業を見据え、市内の交通手段の拡充と街の活性化の両立を目的として今年3月にスタートした。市が実施主体となり、民間企業が運営するというスタイルをとっている。

「観光客の移動手段としては、バスやタクシー、レンタカーなどが一般的ですが、『まちのり』はフランスのパリ市で実績のある同様のサービス『ヴェリブ』（http://www.velib.paris.fr/）などを手本に、サイクルポート周辺の賑わい・人と街のコミュニケーションの創出、回遊性向上による地域での消費誘導、環境負荷の軽減などの効果を狙ってサービス設計しています」（（株）日本海コンサルタント 計画技術研究室 兼 まちのり事務局リーダー 片岸将広氏）

自転車の貸し出し・返却は各サイクルポートのキオスク端末でシステム化されており、セルフサービスで利用できる。1日利用の基本料金は200円で、時間に応じた追加料金がかかるが、30分以内にサイクルポートに戻せば追加料金は0円。つまり、30分内であれば、何度利用しても基本料金だけで済む。

サービス開始時から各ポートの貸し出し可能台数をモニタできるWebサイトも開設された。しかし、PC版とフィーチャーフォン版のみで、スマートフォンに最適化されたページはなかった。それを指摘・提案したのがWeb制作会社PIAPPAの谷川仁弘氏だった。

「今後、スマートフォンからのアクセスが増えることが見込まれているのに、最適化されたUIがなかったんです。街の中で利用というユーザーの利用シーンを考えると、スマートフォンに最適化されたサイトも必要なのでは？といった話を片岸さんと交わしたことから始まりました」（谷川氏）

スマートフォンは、人と地域とを結ぶプラットフォーム

勇気を持って情報を捨てて、利用者の不便を極小化する

谷川氏は、ユーザーの利用環境に合わせた情報設計の大切さを説き、大胆な情報の整理を提案した。「これまでWebは情報を集めておく場所という認識でした。しかし、スマホ版は情報を捨てるのが重要だと。捨てるのには勇気がいりました」（片岸氏）

街中での利用を想定し、各ページはファーストビューで情報が見通せるように情報を精査した。片手での操作や押し間違いの可能性などを前提に、ボタンの大きさや位置を設計している。そして最も利用される「サイクルポートを探す」メニューは、全ページで表示されるようにした（02）。ページを行き来させない導線の設計だ。

クライアントとの密な連絡と対話がよりよいサービス開発につながる

スマホ版の開発開始から納品まで約3週間（うち1週間は端末テスト）という超短工期だったという。「苦労したのは、特定機種での表示崩れとGPS情報のズレですね。後者に関しては告知していましたが、実際に目にすると、こんなにズレるの？と。解決のしようがないので、注意文で対応しました」（谷川氏）

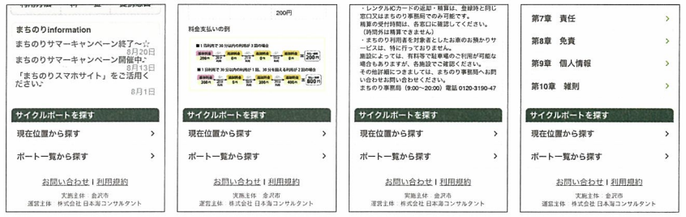
携帯端末向けページの開発では、こうした端末や機種に依存する解決困難な問題が発生する。「時には問題そのものが理解できないクライアントさんもいます。そうなると提案の意味も理解いただけず、結果的にユーザーに不便なものになってしまいます。今回は密に連絡を取り、議論しながら開発できたので、時間的予算的な問題はありましたが（笑）、いいものが作れたという実感があります」（谷川氏）

地域密着サービスとスマートフォンの好相性

地域の活性化を謳った事業が全国各地で盛んだ。スマートフォン最適化サイト構築は、利用者の利便性向上という点からも開発の容易さという点からも非常に親和性が高いように見える。

「将来的には『まちのり』の利用情報だけでなく、街の利用情報も載せていきたいですね。スマートフォン版サイトは、人と街のつながりのプラットフォームになっていく可能性があると思います」（片岸氏）

02　「サイクルポートを探す」メニュー

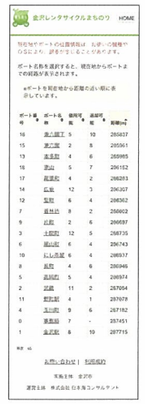


スマートフォン版の各ページの下部には、必ず「サイクルポートを探す」メニューが表示される。「一度使い終わった後に、また使いたくなるようなサイトになるように設計しました」（谷川氏）

03　検索ルート案内

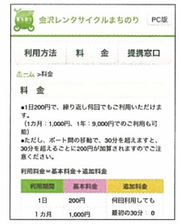
検索ルート案内機能。現在位置から最寄りのサイクルポートまでのルートを地図アプリ上に表示する。こうした端末の機能を活用して設計するのも、スマートフォン版サイト制作では重要なポイントだ

04　「現在地から探す」ページ



スマートフォンのGPSを活用し、現在地から距離の近い順にサイクルポートを表示する。「スマートフォンサイトの制作は、フィーチャーフォン用のサイト制作と比較すると楽ですね。IE6や7のことを考えずに済むので、PCサイトの開発よりも簡単かもしれません。ただ、特定機種での表示崩れやGPSの精度問題などがあるので、端末テストは大変です。電気店やケータイショップで確認することもあります（笑）」（谷川氏）

05　「料金」ページ



「外出先での利用なので、ページの軽量化には腐心しました。ボタンはすべてCSSによる描画です。できるだけ画像を使わないようにし、コードも軽量化しています。ただ、コードの軽量化は一部の機種で表示崩れするので、あえてそのままにしているのもあります」（谷川氏）

06　まちのりFacebookページ

http://www.facebook.com/machinori.kanazawa
『まちのり』事業は、ソーシャルメディアを使ったユーザーとの対話も積極的に推進している

07　「まちのり」の利用シーン

『まちのり』事業は2010年8〜10月にかけて社会実験が実施され、利用者の好評を得て2012年3月から正式導入となった。こうしたコミュニティサイクル事業は、札幌市や富山市などでも運用されている。「金沢市の『まちのり』は、クレジットカードがあれば事前登録なしですぐに利用できるのが特徴」（片岸氏）